

なぜ豪ドル 80 円割れは一時的だったのか？

マーケット エディターズ・吉田 恒

FX の人気通貨である豪ドルは、一時の続落リスクが一息ついた形となっている。そこで、対円、対米ドルでそれぞれ足元の状況を再確認してみよう。

《資料1》のように、豪ドル円は、8月以降米株との相関性が少し崩れ、米株に比べると豪ドルの上昇力が鈍い状況となっていた。そんな豪ドルは、《資料2》のように、引き続き日豪金利差では基本的に説明できる状況が続いていた。以上からすると、米株に比べて豪ドルの上昇力が鈍くなっていたのは、豪州金利の影響が大きかったことがわかるだろう。

ただ、そんな金利差豪州優位縮小も先週までに一巡したことで、豪ドルも一時 80 円割れとなった動きは一時的にとどまった。これで豪ドル下落リスクは峠を越えたのか、それとも再開する可能性があるかは、豪州金利の行方の見極めが鍵になるだろう。

《資料1》



《資料2》



これが豪ドル米ドルだと少し事情が違うようだ。《資料3》のように、豪ドルの対米ドル相場は、そもそも7月頃から金利差で説明できる以上の豪ドル高・米ドル安になっていた。当時、盛んに「ユーロキャリー」の噂があったが、それを裏付けるものかもしれない。金利差で説明できる以上の豪ドル高は、豪ドル「買われ過ぎ」拡大の結果だったのではないか。

最近にかけて、ユーロの金利上昇かつユーロ高により、「ユーロキャリー」逆流、それは豪ドル売り拡大をもたらしたようだ。金利差を超えた豪ドル高が修正されてきたということになる。

ただ、そもそも金利差でも1豪ドル=1米ドルを大きく割り込む豪ドル反落は微妙なようだ。また、《資料4》のように、豪ドル米ドルは、CRBインデックスとの相関性も高いことがよく知られているが、そのCRBインデックスはQE3期待もある中で上昇傾向が続いている。

以上からすると、米豪金利差が一段と縮小するか、またはCRBインデックスが大きく反落に向かわない限り、対米ドルでも豪ドル一段安は微妙なのだろう。(了)

《資料3》



《資料4》

